

I—2 パーキンソン病患者の視空間的ワーキングメモリー能力について

○宮崎 晶子¹⁾* 飯島 睦¹⁾ 大澤美貴雄¹⁾ 岩田 誠¹⁾

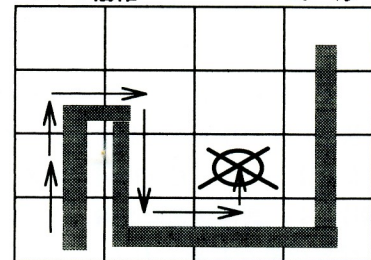
【目的】近年パーキンソン病（以下PD）患者の認知障害のひとつとして、ワーキングメモリー能力について検討されてきているが、その障害の有無については結果が一致していない。そこで今回我々は視空間的なワーキングメモリー課題として迷路課題を行い、ウィスコンシンカードソーティングテストの結果と比較検討した。

【対象】対象は東京女子医科大学神経内科外来受診中のPD患者15名（平均年齢68.1±7.7歳，MMSE=28.1±1.6），重症度はHoehn and Yahrの分類でStage以下の中程度および軽症例を対象とした。対象群は過去に中枢神経系の既往のない者18名（64.8±5.4歳，MMSE=29.0±0.6）であった。

【方法】迷路課題はコンピュータディスプレイに提示したマトリックス（4×4または5×5）上の○を、左下のマス目からスタートさせて、どのような経路で移動させて右上のマス目のゴールまで到達すればよいかを予想していくものである。例えば図1に示してある灰色の経路が正答の場合、矢印のように進んでいったとする。ここで間違ったマス目に入ると、○はスタートに戻ってしまい、最初からやり直さなくてはならない。実際には先にどのような経路で進んだかは示されないので、どこで間違ったかを思い出して、別の方向を選択していかなくてはならない。このようにして何回やり直しをしてゴールまでたどり着いたか（試行回数）を測定した。課題の難易度はマス目の数が4×4の「簡単」と「複雑」，及び5×

5の「簡単」の3段階に設定し、各難易度で3回ずつ行った。「簡単」レベルでは○は上か右にしかなかったが、「複雑」レベルでは上，右に加えて左と下を加えた4方向が選択肢になる。なおこの課題は時間制限はもうけなかった。その他に視覚的な記憶範囲の測定にはWMS-Rのvisual memory span (forwardとbackward)とウィスコンシンカードソーティングテスト（慶應バージョン）を用いた。

図1 4×4複雑 ゴール



スタート

【結果】

1) visual memory span (以下VMSと略す)の得点はPD群と対象群に有意な差は認められなかった。

(PD: forward=8.4±1.5, backward=6.7±1.2, 対照群: 8.3±1.2, 7.1±1.8)。

2) 迷路課題では難易度ごとに3回の試行回数の中央値を求め、グループ間で比較をした。その結果PD群は対象群に比べると4×4（簡単）(PD: 4.6±0.8, 対照群: 3.1±0.3 p<.05), 及び5×5 (PD: 5.7±0.4, 対照群: 4.3±0.3 p<.05)でゴールにたどり着くまでの試行回数が有意に多かった。

1) 東京女子医科大学脳神経センター神経内科
*現) 市川市リハビリテーション病院

